

秋田智司君のこと

この五十年余、いろんな大学で教員生活を送らせてもらった。送り出した学生はどのくらいの数になるうか。初期の卒業生はすでに定年退職、教員職に就いた者の何人かは名誉教授になったりしている。

二十年前、拓殖大学に奉職、国際開発学部（現・国際学部）の創設に関わって働いたことが思い出される。定員は一学年三〇〇名、四学年で一二〇〇名だった。第一期生ともども八王子のキャンパスで過ごした一年間が、私の教員生活の中では最も鮮明な記憶として残る。「開発」とは「現場」のことだといひ、講義科目の開発経済学を私はフィールドエコノミクスと呼んでいた。教場より現場で学生を鍛えようという学部創設の精神であった。

TICAD（アフリカ開発会議）がこの八月、横浜で開かれた。挨拶に立った安倍晋三総理が一人の青年を脇に立たせ、「一一〇〇を超えるタンザニアのキオスクでソーラーランタンのレンタルを実施し、連日、数万人が借りにくるまでに育てた会社。それが東京のWASSHAです」と、これを起業し

渡辺利夫わたなべとしお（拓殖大学学事顧問）

一九三九年、山梨県生まれ。七〇年、慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。筑波大学、東京工業大学教授などを歴任。拓殖大学国際開発学部学部長、学長、総長などを経て、二〇一五年十二月より現職。

た秋田智司君を聴衆の前で紹介しているではないか。

秋田君は国際開発学部の第一期生。私のゼミに入り、卒業後の進路に何かと悩みを抱え幾度か私を訪ねてきた。しばらく前から、「秋田君、タンザニアの農村でデジタルグリッドのビジネスを始めて軌道に乗ったらしいんですよ」といった話をアフリカ開発に強い関心をもつ同僚の甲斐信好君から聞かされてはいた。でも、まさか、日本政府が主導する首脳級国際会議の場で総理によって紹介されるとは。

タンザニアの未電化地域の小規模売店でLEDランタンのレンタルサービスをやっているという。現場に根ざした人間でなければ思いもつかないビジネスである。シャンプーや味の素を袋に小分けにして売っている露店をタイの田舎などでみかけたことがあった。当初は社会貢献のつもりで始めたのだが、ビジネスにしなければ到底「サステナブル」なものとはならない、というのが秋田君の次の発想だったという。SDGsといえ少々しかつめらしいが、要するに秋田君流のことなのであろう。